

『なくならない食物』（ヨハネの福音書 6 章 22～34 節）2020.9.27.

<はじめに> 前日に向こう岸でパンの奇跡(1-15)に与った群衆が、イエスを捜しにカペナウムまで追い掛け、ようやくイエスを捜し当てました(22-25)。25 節以降は、群衆とイエスの対話が綴られています。私たちが折々に対話するとき、どんなことを心掛けていますか。

I 捜す人々

①探≠捜(25-27)

欲しいものには「探す」、見失ったものには「捜す」が使われます。群衆はイエスを見失ったから「イエスを捜し」(24)しました。見つけられたイエスがなおも「わたしを捜しているのは」(26)と言われます。群衆が捜しているのは実は何だ、と主は言われるのでしょうか。

②神のわざ(28-29)

「永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい」(27)と聞いて、彼らは神のわざを行うことを考え、何をすべきかと問い直します(28)。イエスの答えは「神が遣わした者を信じること」(29)でした。人が考え付く「神のわざ」には、他にどんなことがあるでしょうか。

③信じるためのしるし(30-34)

イエスが神から遣わされた者であると信じるために、先祖が荒野で食べたマナ(出 16:4,15、詩 78:24-25 他)を引き合いに、彼らは更にしるしを求めます。彼らの本心は 34 節で明かされます。与え主よりも、賜物であるパンを切望していました。

II 答えるイエス

①しるしが指し示すもの(26-27)

彼らがイエスを捜していたのは、パンを食べて満腹したから、とイエスは凶星を突きます。奇跡・しるし(26)は、人の子が神から遣わされた者である証印(27)です。私たちは御業や賜物から、施主・与え主に目を向けているでしょうか(インマヌエル讃美歌 343)。

②信じることが神のわざ(28-29)

「神のわざを行う」(28)と言った背後には、神から受けるためには、人は何か対価を差し出さなければならない、という志向があります。これが律法主義です。主は「神が遣わした者を信じること＝神のわざ」を打ち立てられます。これなら誰にでもできます。

③天からのパン(30-33)

主はパンのしるしを行われたのに、彼らは更にしるしを求めます(30)。まことに、まことに(32)は真理を語る枕詞です。パンを与えたのはモーセではなく父なる神であり、マナは天からのパンの予告に過ぎず、天から下って来て、世にいのちを与える実体を示します。

III 伝えたいことがある

①似た物語

イエスが与えるものは、受けてもすぐに無くなるものではなく、いつまでも無くならない永遠のいのちに至るものだ、と聞いてそれを求める物語が、本章より前にあります。その物語の終盤でイエスが言われたことばにも「食べ物」が出て来ます。

②あなたがたの知らない、わたしの食べ物(ヨハネ 4:32,34)

食物はいのちを維持・成長させるために必要不可欠なものです。永遠のいのちにも食物は必要です。それが天から下ってきたまことのパンである主を信じることです。加えて食物は交わりと喜びにも深く関わります。御心を行い、主をより深く信じることに見出されます。

③私たちの食べ物

日常の出来事、時折経験する不思議な出来事の中に、主イエスを見つけ出す喜びを味わっているでしょうか。不可解・不明の事柄に直面するとき、全てを治められる主と向き合い語らう喜びを知っていますか。主から語られ教えられるとき、心は喜びにあふれます。

<おわりに> この種の喜びは、現象の如何に関わらず、私たちを満ちし、力づけ、より主を信じ、期待し、愛し従って行こうと奮い立たせ、私たちの内にある永遠のいのちを成長させます。「いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。」(H.M.)